知事との県民対話集会（喬木村）概要

・開催日時　　令和５年10月11日（水）　午前10時30分から正午まで
・会　　場　　喬木村福祉センター　多目的ホール
・参 加 者　　県民70名、市瀬喬木村長、阿部知事、丹羽南信州地域振興局長　他
・テ ー マ　　多様な世代が参画するむらづくりを目指して

【参加者】
・少子高齢化で大変な世の中になっている中で、しあわせ信州創造プラン3.0のプロジェクトの１番に「女性・若者から選ばれる県づくり」を掲げてくれたことはとても嬉しく思う。
・働きながら子育てをしていくことを応援することが大事だと思う。国でも様々な施策があるが、働きながら子育てをしている母親は、子どもが熱を出したからと休むことが周りに理解されなかったり、職場環境で難しかったりする。子育てに温かい気持ち、雰囲気を醸成し、知事が率先して子育てにやさしい長野県、子育てしやすい長野県であることを発信してほしい。
・飯田工業高校跡地のエス・バードは航空産業の拠点であるため施設内を使うことは制限されている。バックネットの方に野ざらしになった空き地があるので、そこが子どもを遊ばせる場所になれば子育て世帯が外に遊びに行ったり、高齢者も子どもの声を聞きながら休めたりできる。県の所有地だと思うので、そういった場所になればよいと考えている。
・保育園について、延長保育や途中入所、土曜保育などが増えており、職員の負担が増えて苦しい状況であると聞いている。預かる側の心の安定や待遇改善にしっかり取り組んでほしい。

【知事】
・県の総合計画の「女性・若者から選ばれる県づくり」というのは、ある意味一番重要な取組の方向性だと思っている。対話集会を行う中で、女性・若者から選ばれる県にするために必要なことは何かと考えてきたが、大きく３つある。
・１つは育児休業である。国全体で非常に充実してきている。県職員については、女性職員の取得率はほぼ100%で、男性職員は４割弱という状況である。これを100%にしようという目標を立てた。２つ目は意識の問題である。隣の人が仕事をしているのに休んでもいいのかという意識があると思う。一人一人の意識を変えないといくら制度があっても社会は変わらない。こういう意識を皆さんと変えていきたい。もう１つはスキルの問題である。男性が育児休業を取得して家にいても、育児にも参加せず、料理もしないでは、形式的には育休取得率は上がったが、世の中は何も変わっていないことになってしまうと思う。
・エス・バードは県の土地ではあるが、南信州広域連合と飯田市に貸しているところ。地域でこういうふうにしたいという考えがあれば、全くない選択肢ではないが、産業、学びの拠点であり、方向性は少し異なるのかなというのが今の認識である。
・保育士、介護職など資格職種への処遇が低すぎるのではないかと思っている。子育てにやさしい県をつくるには、保育士の処遇改善は重要な課題であると考えている。

【参加者】
・高齢者福祉に携わっている。介護の担い手不足が著しく、特別養護老人ホームのショートステイが中止になっているところがあり、デイサービスの曜日も制限されている。10年後にサービスを受けたいのに受けることができるのか心配している。
・一番大変なのは賃金の問題である。時給単価は飲食チェーン店などに太刀打ちできない状況となっており、実際に介護職の人が流れているケースもある。

【知事】
・日本は賃金水準が低すぎると思う。物価が上がっているが賃金が上がっていない。
・行政がある程度価格を決めている保育や介護の職員の賃金を上げる方向性を出さないといけないと思う。国にもそういう話をしているが、何年後かの改定期まで待つと言われてタイムラグがある。
・問題意識の方向性は同じと認識しているが、介護施設の職員の賃金を上げるとなると相当なお金が必要になる。国が本格的な賃上げに舵を切ってもらわないと難しいので、我々からも要望していきたいと思う。

【参加者】
・高校生の活動を応援するために、高校生の活動団体を県に登録して、活動の責任や資金の面でサポートしてほしい。
・活動に当たっては、教育委員会から後援をもらう必要があったが、高校生では取ることができなかった。私たちの場合は、高校に後援を取ってもらったので活動できたが、持続可能ではないと思っている。県が登録制度を設け、そこに登録された団体は後援が取れるような仕組みがあると活動しやすくなると思う。
・県の元気づくり支援金は、全額支援ではなく、高校生だけの団体では資金が出せない。厳しい条件や限度額があってもよいので全額支援してもらえると活動しやすくなると考えている。

【知事】
・元気づくり支援金や高校生の活動団体への支援の提案はよく考えたい。探究的な学びが広がっている中で、高校生は地域に出ていった方がよいと思うし、地域の人は学校に入ってほしいと思っている。

【参加者】
・食育に取り組みたいが、どうすればよいか分からないという人が学校側と教えたい側の双方にいる。
・学校が取り組みたいと思っても、先生方は異動があり、また、地元の先生でなければどこに依頼すればよいか分からないと思う。学校のカリキュラムに合わせて無理なく食育に取り組めるようになればよい。
・それぞれの地域に郷土食があるが、家でつくったことがないという子どもが多い。学校の授業の中で伝えていく必要があると感じている。県独自の郷土食育アドバイザーといったような資格を設け、地域と学校をつなげられるようになるとよいと思う。

【知事】
・ご提案はもっともなものだと思うが、小学校のカリキュラムに関し知事には権限がない。
・教育を変えないといけない時期に来ていると感じている。これまでの日本は工業社会でもあったので、画一的な教育を行い、同じことができる人材の育成が重要とされてきたが、これからは、新しい価値をどう創造するかを教育しないと世界から取り残されてしまうと思う。各学校や地域が、自分たちはこういう教育に力を入れようと考えていくことがよいと思っている。

【参加者】
・喬木村の伝統野菜である志げ子なすを生産している。今年のような異常気象では、通常の栽培方法ではよいものができず、収穫量も減って注文してもらっても断ることが多くなっている。生産者の中では上手く栽培できず、今年でやめようかという声も聞いており不安になっている。より専門的な技術面でのアドバイザーにいてもらえるとありがたいと思う。

【佐々木南信州農業農村支援センター所長】
・農業農村支援センターでは、今年の５月と７月に栽培の講習会を開催している。個別の状況については、相談いただければ担当者が現地に行って対応したいと思う。
・信州伝統野菜認定委員会には専門家がおり、現地で指導を受ける仕組みがある。県にも専門職員がおり、現場で講習会を行うこともできるため、一緒に進めさせていただきたい。

【参加者】
・県道上飯田線の小川地区と氏乗地区の間は一年のうちほとんどが通行できない。一刻も早くトンネルをつくっていただき、安心して通行できるようにしてほしい。

【知事】
・リニア関連道路の整備を県としても進めている。直ちに行うとは言えないが、問題意識は共有し、どういう対応ができるかしっかり考えていきたい。

【参加者】
・議員のなり手が少ない。報酬が少ないなど、全国的に同じ状況だから仕方がないではすまされる問題ではないと思っている。
・多様な人材を確保したいと思っている。周りの人や会社などの理解も必要である認識している。これだけ人材不足が進むと、事業所の理解促進などについて県の力もお借りしたいと考えている。

【知事】
・極めて重要で重い課題と認識している。住民全体に問題意識を持ってもらわないといけない話であると思う。
・公務員は辞めなければ選挙に立候補できない。非常にハードルが高いため、落選したら復職できるなどの制度が必要であると思う。企業でも柔軟な休業制度などが必要ではないか。また、夜間や休日に議会を開くことも考えないと解決に結びつかないのではないかと思う。

【参加者】
・自治会や公民館、消防団といった地域コミュニティを担う活動をするため、コミュニティ休業制度のようなものをつくったらよいと思う。企業や経営者の理解が必要である思うが、支援制度をつくることで、誰もが活躍できる機会が広がるのではないか。

【知事】
・共通の課題は、人口が減っている中で、人材不足が顕在化している、または、顕在化する可能性のある職種があるということ。産業界の方とそういったお話をする中で、私は一人多役の社会にする必要があると思っている。
・県では地域貢献活動をする職員の応援制度をつくっている。さらにもう一歩進めて休業制度もできないかと思っている。市町村や企業にも広がればよいと考えている。